ばんそう

4

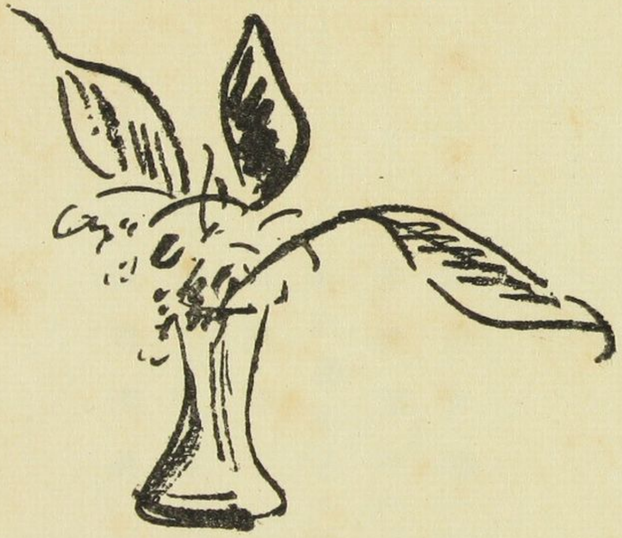
伴奏

第四輯
（夏の巻）

短歌小曲集

川路柳虹編

（大正六年七月）



東京 曙光詩社 發兌

碧玉集（短歌集）

牛小舍……前田夕暮（二）
草の笛……茅野雅子（五）
青嵐……若山喜志子（八）
時さらず……山田邦子（一一）
朝櫻……岡本かの子（一三）
初夏の光……渡邊湖畔（一六）

若き蘆の葉（小曲集I）

小曲……堀口大學（二〇）

雨……長島豐太郎（二五）
緑樹抄……川路柳虹（三〇）
シモンズ短章……アヽサア、シモンズ（三五）
場師（散文詩）……灰野庄平（四一）

水いろの空（小曲集II）

葡萄の花……朱耀翰（四四）
銀の小笛……窪田照子（四八）
瑪瑙の小壺……淺田眞佐子（五三）
戀慕流し……竹内實（五四）
熱愛……清水浮烏（五八）
夕空……小室楚囚（六二）

ひとづま……松尾義一（六三）
時雨……藤枝地籟（六四）
小曲……正井謙二（六五）
日常悲劇……伊東慶佶（六七）
勞働の後……大西花郊（六九）
六月の夜……川路せい子（七〇）
松の葉（評論）……川路柳虹（七三）

紅蘭集（短歌集）

凝視……秋月露村（九二）
正井謙二　清水浮烏　滑川義彦
淺田眞佐子　大島武男　石渡白映

倉石ちから　高橋一峰　勝本正晃
川路萌葩　菊田諦知郎　西川二紫星
伊東慶信　谷口豐彦　大西花郊
竹内實　中原幽月　宮崎紅聲
大澤忠一郎
垂髪少女……松本福督（一一八）
榮光……前田春聲（一二〇）
Am Kriegsende……M. Katsumoto（一二五）
深海夜曲……平戸康吉（一二六）
やまうど……澤ゆき子（一三〇）
異つた朝……松本福督（一三三）

怖ろしい祈禱……北山哲平（一三六）
野にて……藤井月泉（一四〇）
五月の土……倉石ちから（一四二）
太陽……橋爪南洋（一四四）
都會の朝……森泉たけし（一四六）
夏拾遺……廣川菽泉（一五〇）
食後の卓……柳虹生（一五四）

古き聖盃（エッチング）……長谷川潔

碧玉集

牛舍　前田夕暮
草の苗　茅野雅子
青嵐　若山喜志子
時さらず　山田邦子
朝櫻　岡本かの子
初夏の光　渡邊湖畔

J'arrive tout convert encore de rosée
Que le vent du matin vient glaceràrmon front

——*P. Verlaine*——

牛小舍

前田夕暮

牛小舍の庭の眞土の色黝み花まばらなる一もとの桐

日のみつる牛舍の庭に桐の花こぼれてゐたり牛ら靜もる

一本の桐の若木につなぎたる牛の手綱のたゆみたるかも

日の光したたる晝の牛小舍の屋根にきてなく一羽の雀

我が兒にも感じ入りたるつぶら眼をまたたきもせで牛にみいるか

日向なる牛の臭ひの強きからこの露草のしなえたるかも

體重き牝牛は腹を地につけて呼吸づきにけりみごも
るらしも

うすあかき乳のふくらみに土すこしまみれて悲しみ
ごもるらしも

一匹の牡の牛ありて黒瞳すみたり尻尾強ふりにけり

牛をみる我が兒の顔にあつまりし鮮かな血の色のい
としさ

草の苗

茅野雅子

大なる風にむかひてたたかへる大きなる葉の青桐の
葉よ

大なる青桐の葉がひるがへりひるがへりつつ夏ふか
みゆく

桐の木の根かたにまきし草の芽よいとなごやかに青
みそめたり

ひとかたまり細き葉いでし孔雀草天をみつめてある
ごとく見ゆ

孔雀草そろうて青く茂りたり雀のあそぶ赤土の庭

草なれどあはれはかなしつくねんとひとつはなれて
生ふる孔雀草

一本づつわけて植うれば孔雀草たよりなげにも見ゆ
るなりけり

人間のこの身よりげにやすらかにのびのびとして生
ひし孔雀草

ほそき葉の青くかがやく孔雀草みればいよいよさび
しさまさる

生き生きと力いつぱいのびあがる草の族にもならば
よからむ

青嵐

若山喜志子

をと女子は歩み入るべし水の邊の若葉木立に風わたる見ゆ

わが胸は焦(こが)れて苦し昨日今日若葉に風のとわたるみれば

汗ばみて咲くといふなる桐の花郊外の家に今朝見つるかも

苗賣のすがしき聲にさそはれてくさぐさ花の苗買ひにけり

となり合ふ弓道場の畫しづか的(まと)射(う)つ音のひとりひそけき

ひつそりとかくれて業(ゆふ)をつむ人か弓道場の一人の男

入日

見よかの赤き入日とをどり入る君が心は涙とかよふ
見はるかす赤き入日のたふとさにおとす涙と君見つるかも
さびしくてかへらむものをさびしがる家にあひなば死にたまふべし

時さらず

山田邦子

櫻花咲きの盛りの枝たわみ此朝嵐に吹きしなへをり
咲く花のいのち短かき花ざかり時さらずやも此風に散らむ
朝嵐しきれる庭に花ながら吹きもまれ見ゆ櫻は一本

＊

わが立てる折しも庭の土に來て物食ふ雀見つゝ愛し
も

久方の雨に晴れ間の夕日ざし過ぎにし鳥の白き腹見
たり

息の緒にむつみし弟も時されば我をのゝしる悲し人
かも

朝櫻

岡本かの子

朝櫻また泣きはれし瞳をあげてこのあかつきも我あ
ふぎけり

泣きはれし瞳にここちよや朝櫻ふくみし露のしたた
りもせず

たわたわと咲ける櫻の下ふかみまだこのあした人しふまずも

たちぬれて人戀ひ泣かん露重きこの朝ざくら風渡れかし

朝ざくら露まだ重し二つ三つちぎり來て曉の床に入るかな

散り散るよ都に今ぞ櫻ばな人想ふ間も靜こゝろなく

はるけきをまして櫻の花しげく散り敷き閉ぢて人なほはるけし

この春のひとりとなりし我に散る櫻ふぶきのいやしげきかな

初夏の光

渡邊湖畔

新潟に船待ちしける時

浪あるる海のかなたに汝が歎く哀れにほそき夜の電
話かな

＊

やはらかに若葉のみどりかがやきて木木の生命はい
ま滴れり

風かをる國府の川邊に日を浴びて眞菰のひかる夏よ
はつ夏

ゆあみせし後の疲れにおぼろ夜の月のやうなる身と
思ひけり

まひる野をやや汗ばみて歩みつつ生命のわかさいと
ほしみけり

ゆく春やふかき霞のおのづから鳴りいづるかと思ふ
鐘の音

海原はややふくらみてゆるやかに浪のうねりの光る
たそがれ

短夜のあまく悲しきおもひでをくりかへさせて啼け
る葦切

悲まず恨みずすこしおほらかに生きむとぞ思ふ三十
路せし吾

友の新婚に

二人すむ生きの命の尊さを眞實にいま歡びぬらむ

若き蘆の葉

小曲集 I

晶子夫人に捧ぐ　堀口大學

雨　長島豐太郎

緑樹抄　川路柳虹

シモンズ短章　アーサア・シモンズ

□

場　師　灰野庄平

小曲

品子夫人に捧ぐ

なげき

戀のよろこび消えやすく
殘るなげきの果しなや！
されば われ云ふわれら皆
生き甲斐もなき世に生くと！

堀口大學

遠き戀人

汝(なれ)とほし
われかなし
青ざめし
あかつきの
み空なる
星よりも
汝(な)がたより
來るはまれなり。

ふる里

生れし國にある時は
家なき人となりにけり。
人は知らじなふる里を
外國(とつくに)と見るわがうれひ。

われ呪ふ

われ呪ふわが善行を！

なさけを愛をあはれみを！
われのうれひとかなしみと
凡(すべて)そこより生るれば！

五月

「五月はやさしかゞやかし
五月は母の愛に似る……」
君は知れるやわが母よ！
かくと歌ひてわが泣くを？

海

あしたの海は父の愛
ひろし明るしくまもなし。
夕(ゆふべ)の海は母の愛
深ししづけし果しなし。

雨

長島豐太郎

久しぶりで烈しい雨がふる。
暗く動搖する空から、
見えぬ生命(いのち)と力とが
せい一ぱいに大地へたたきつかる。
彼等はぬかるみの往來へ
驀地(まつしぐら)に自己の跡をつける。
無限の踊の列だ。
今、印したばかりの足跡を

すぐ、他の奴がふみにじつて
また空しく全力に自分の跡をつけてゆく。
彼等の肯定は否定に根ざす花だ。
彼等のよろこびは、悔と怒と歎とを溶かして得た結晶だ。
彼等にはふりかへる必要がない。
直ちに一つの濁流となつて
大地の盡きる處まで貫流する。
おお、雨の如く——。

風景

海の匂ひのする平野だ。
上からは半透明の太陽が
晩春にふさはしい女の光をふらし、
田の水が光る。
若者の踏む水車が光る。
そばには水楊(かはやなぎ)が五六本、さうさっと緑の諸手を天へさしのべてゐる。
地平と並行する赤い荒つぽい堤の上では、
護岸工事の泥を運ぶ小舟を、
三人の男が綱で曳いたり棹で押したりして狹い堀割をのぼつてゆく。

緑樹抄

あらし

川路柳虹

嵐は樹に吹く、梢にふく、
庭の小徑の花に吹く、
手でもいでとらうとおもうた
畑の夏蜜柑の一ふさを
なんなくおとして終うた、

嵐は樹にふく、庭にふく、世界にふく、
みんなのこらず葉をふきちらし
さて、なんでわが身の心に吹かぬ、
夏もをはらぬこの夕ぐれの
たへぬあつさになやんだ胸に。

＊

風りんがなる、
たゞ風にゆられて
みどりの色に鳴る。
消えるまで
ほそやかに鳴る、

きえ入るまで
なる、なる、なる。

加剰

あふれるものがよい
あふれすぎるものほどたふとい
酒がめに酒があふれるやう、
湯ぶねに湯があふれるやう、
惜し氣もなく、まんまんとたゝへた中から
ざんぶざんぶとあふれ出すことが肝じんだ。

一ぱいになれ。
あまりをすてゝもまだ充分な
それほど一ぱいになれ。

あひづ

宵のとぼそに灯をおいて
ひとを待つたはむかしのこと、
六月の夜のハルモニカ……
わかき少女は街にでる。

りんだう

むらさきのりんだう、
たにがはのくさむらにさきでた
りゝしいりんだう、
りんとしたりんだう、
むかしかたぎのうちにそだつた
ひとりむすめの
むらさきのりんだう。

シモンズ短章

—Arthur Symons—

夢

ながき一夜を吾絶えず彼女の夢のみ見たり、
雨とそゝぎしわが涙枕に濡れて果しなし。
目覺めては忘れんとする男ごゝろを
巷のなかに求むれど。

夜の落ちくればまたわれは
無益なる恐怖にかくも打ち震ふ、
あかつきに醒むればまたもわが涙
枕に濡れてはてしなし。

(Silhouettes) より

丘の雨

夜、海べにちかき丘の上
丘のうへには雨の垂衣、
その雨と霧とのなかを彼の女は
安らけく暖かき街の光を逃れきて、われがもとへと驅

けよりぬ。

雨はかゞやく黒髪に
また面差に照り反えぬ、
彼の女のかくもわが身にきたれるを、
かしこにあるはただその夜と雨とのみ。

(Silhouettes) より

にほひ

きみが髪われにかゝりて
波と打つその匂ひ堪へがたし、

おぼろなるその香りぞ吾ら互みに
接吻を交はせしあとに往き來する。

夜は戀に儚き時をあたへぬ、
さはれいま朝の光りはいち早く
驚くきみが面をば
亂れざまにもうかゞひぬ。

唇交はす『さらば』の言葉、そのあとに
きみが姿の消えゆけば、殘るは幻し、
あゝ空しきなかにいまも漂ふ

その黑髪の匂ひこそ。

(Silhouettes) より

秋の戀

世はすでに秋、わが心のみ秋と云はんや。
木の葉地に敷き、
葉の緣、たえず朽ちゆく、
夏に別るゝ樹々の葉よ、吾には「愛」の、なほ淋しくも殘れ
るに。

げに季節の面ぞ夙く移り過ぐ、囁き交はす瞬間は

尊(たふと)き戀の時の間はかく徒らに失はるゝ
さはれ樹の葉よ、きみも嘗ては歡樂を有(も)ちにしものを。
きみの夏こそあはれ儚き。

(London Night)より

柳虹譯

場師

灰野庄平

庭の樹々は五月の柔い日光の母にあまやかされて、若やかな舞踏手(ダンツェル)の樣に、枝を延べ葉を展げてにこやかにのび上がつて行く。すると或朝意地惡に親切な場師(にはつくり)が、頑固な形をした鋏を以て齒ぎれよくパチリパチリと若やかな枝葉を刈つて行く。樹々は蟠屈した舊幹を裸出して見慣れぬ醜い姿を肉情の暗く燻(くゆ)る情人の初夏の眼の前に暴露する。

けれども雨が降り、風がそよぎ、きらびやかに日光が照り渡ると、やがて綠葉に暗さを加へ溺るゝ力は枝々を泳ぎ幹を突き上げ、生命はむせび出て樹身をくゆり籠め、樹々はすつくと其處に立つ。

場師は聰慧なる聖(ひじり)であつた。彼は放肆なる自由が樹を生長せしめずして萎(な)えさせ、微妙なる拘束が却つて樹に遙か大なる自由を與へることを知つて居るのである。

けれども樹々箇別の天分を嗅ぎ當てる感性は神機である。此神機に參與する能否、深淺によつて場師の上根下根は別れる。その微妙さの程度によつて場師は樹々を枯らし、又は『美しき自然との合作』を得る。

道德に於て、教育に於て、更に藝術に於て、場師の神機はひとしく尊重さるべきものに相違ない。

水いろの空

小曲集 II

葡萄の花　朱耀翰
銀の小笛　窪田照子
瑪瑙の小壺　淺田眞佐子
戀慕流し　竹内實
熱愛　清水浮烏
夕空　小室楚囚
ひとづま　松尾義一
小曲　正井謙二
日常悲劇　伊東慶佶
勞働の後　大西花郊
六月の夜　川路せい子

□ 松の葉 □

川路柳虹

葡萄の花

朱耀翰

葡萄の花は白く
聖き戀のさゝやき……
群がる蕾のかげに
赤き血潮は充ちたり。
はてなき夢の足跡をしたふ心にか
その花瓣は地に落ちて靜かにひるがへる。
あゝ果樹園のほの暗き蔭に
はかなき戀はあり、眞白き葡萄の花……

眠れる嬰兒

しづやかに眠れ、いとしごの日に
黑き夜は深くも閉し、淡き灯。
又はみどり色の夜着の上に
再び來らざる平和と夢の伴奏を……
あゝしづやかに眠れ、をさなごの日に。
透明の影にうつし出されし唇
かすかに洩るゝ息の音に目は安らけし。
夢は襲ひ來り、又うすれ往きぬ。

再び來らざる幸福と平和の日を
あゝしづやかにも眠れ、眠れ、汝の日に。

ふるさと

はゝのやまひ
今稍に
輕くこそなりたれど……
あゝ旅寢の空に
再び思ひぬ——ふるさと、
あゝ水清き大同の流れ。

かたことまじりの
弟の筆をしのび
春の日暮に
再び思ひぬ——ふるさと。

失なはれし者

やみぢをたどる
幻想と孤獨の境に
たへずまさぐる指先。
あゝ我はた何をうれひてか

なにを悲しみてか、
生命なき笑ひに沈めるぞ……。
常に遠きに有る物等よ
しばし走りと踊りを止めて
再び我が胸に涙のたぎるを待てかし。

銀の小笛

窪田照子

君ゆゑに、
げにもやさしき君ゆゑに、
銀の小笛を吹きならし、

おもひの空におくれども。
君ゆゑに、
げにもやさしき君ゆゑに、
歌は風にと消えゆきし、
あまりやさしき君ゆゑに。

思ひ出

昔の思ひ出を呼びかへせとや、
さても悲しき蛙の唄きけば。

幼きむかしの夏
にほやかな月のゆふべ、
母のかひなの夢にきゝにし、
やすらかな汝の唄、

小田の蛙の唄きけば、
人のこひしき、さていとほしき、
故もわかぬに涙しみいづ。

春の夢

銀の扉をたゝいて春風が、
すぎゆくすぎゆく——
花をわけてゆけども、
たゞ一ちめんにもゝ色のゆめ、
夢の夢、
どこかで鳥が啼く。
あゝたつた一つの妾の夢を、
さまさずにいとしの人へ、
わたしておくれ。

瑪瑙の小壺

淺田眞佐子

尊ければ胸に秘めたる
わが瑪瑙の小壺、ねらひ寄り、
石を投げたる童(わらべ)、憎し、可愛し。
逐ひ出でゝ見れば、
姿あらず、
惡戯のあと、いたづらに眼にこそうつれ。

いたいけな——。
憎くはあれど、
なつかしき思ひ出なれば、
いたましき戀の破片(かけら)も拾ひ寄る

菜園

わが心の菜園、
今、時を得顔に、
蒔ける種子、蒔かぬ種子、
みな芽ぐみ出ぬ。

なつかしくも捨てがたきは雜念なるかな——。
不思議なるもの、生命のぬきがたく、
水かひ、土かひ、藁きせぬ。

おろかしき人のならひか、
貪りの水かひて、
失ふことを知らざりき。

戀慕流し

竹内實

吉原の日暮れを
三浦屋のおもてに立つた
虛無僧よ、
編笠に人目を忍ぶ
權八よ。
村正の刀の冴えに
幾人の血をばながした
白い手にいまは尺八。——
やるせない生命をこめて
吹きすさむ戀慕流しを
わりなくも格子の内に

小紫はおもひになやむ。
ふるふ手をこがるゝ胸に
（うらめしや緋房の十手）
書き送る文もしどろと
山吹の情をのせて
さし出だす鏡の面に
さて、なさけなや雨にやつれし牡丹の姿。

生くる涙

はげしき勞働のあとの

肉と血に溶けこむ
若草のにほひ、
黄玉の日光。
何をかねがはむ
尊さに、たゞ
にじみいづるは
わが生くる日の涙、
土塗れの清き涙。

熱愛

ひとすぢの
かはをへだてゝ、
もえやすき
ふたりのむねは
なみうちぬ。
おもひつめてや
ひとすぢに
わたるなりけり、

清水浮鳥

これやこの
なみだのかはと
きけどひたすら、

さかづき

さけをつぐ
きみがひとみのやゝうるみ
かなしとも
いとしとも
やるせなきせつなさに

まなこをとぢてのみほせば
ひやゝかなれどもゆるかな。

斷章

I.

はるとなれば
みはてぬゆめの
したはしく
またしても
こひとゆめとの
はなぞのを

さまよひあるく
こゝろかなしや。

II.

きみもしるらむ、
わかきをほこるわがむねに
ゆゑなきなみだあふるゝを。
沈丁花のにほひにもつれ、あめにぬれ
ひたすらに「春」のおもひに
しみじみとあまえてみたきこのこゝろ。

夕空

かなしみの薄く
せきあげしごとく
うるめる空
やさしき朱に染む

樹々そよぎ
麥青む
山合ひの靜かなる

小室楚囚

村々のたそがれに
わが思ひはるばる
みのこせし夢を追ふ

ひとづま

忘られぬ心のありて
忘られぬ日をもおもひて、
われと契りし
いまは人妻
けふもまた

松尾義一

たづねきたりぬ。
あはれ人妻。

時雨

藤枝地籟

雨は降る、赤い血潮の雨が降る、
着物通して臓腑へ
しみ込む雨である程に
北山しぐれか、ぬれた小鳥と
傘にちる葉の血のいろに。

小曲

正井謙二

夕とゞろき

赤い雛罌粟の散るころ
果樹園のすみに吐息もらせば
輕い夕とゞろきがひそかに
少女を戀した私の胸に。

蟻

夕、黄色い枇杷の花の下で
人を思うてゐたら
あの澄んだ瞳の光りを思うてゐたら
何か身體にちくちくと
影をひくいたづらもの——
小さな蟻をつひに殺した。

名無草

雲の間にさきいでた
夜の薔薇の月の色

なやめるゆゑに、たゝずめば
君の瞳のかなしかり。

光りを浴びた名無草
一葉むしりてなにかさしぐむ
おもひ病みたる我がこゝろ。

日常悲劇

大いなる債務あるこゝち
堪へずいらゝなやめる心

伊東慶佶

なになればかくも
せめきたりせめきたるや、
見えざる債鬼
なやましくも我を擒にす。

夜の嘆き

あらゆるもの聲をひそめ
『夜』の前にひれ伏す
こまぬぎうなだれ
『夜』の洩らす吐息

『あかるみ』に追はれ
逐はれてさまよふ
よしなき暗の心。

勞働の後

夕のけはひ滿ち滿ちて
夜のとばりは重く下れり、
み空はるかに
涙にそぼつ星一つ。

大西花郊

いとしの馬よ
何を嘶く
朝出でし厩のこひしくてか
つきし秣の貧しさにか
さはれ
けふの務の果てざれば——
いとしの馬よ
母や待たなむ。

六月の夜

川路せい子

藍色の六月の夜のもの憂さは
銀の小匙にまつ赤な苺を、そつとつぶせど
シトロンをかたみにすへど
指にからんだ柳の枝が
ほつきりをれたはかなさを
泣いた涙がしみるよに
私のうでから消えませぬ。

六月だけは

まつかい、苺に、お砂糖をかける六月が
カーテンのかげから忍むで來ました、

悲しみや苦しみは冬のこと
六月だけは王妃のやうに送りませう。

細い指輪を
お堀の月になげるやうな
ひなげしを、ちぎつておいて泣くやうな
甘いなやみに、戀人とたつた二人で
六月だけは送りませう。

□ □ □ □ □ □

松の葉

川路柳虹

本來音曲の歌詞といふものは音曲と伴つて價値あるもので曲調の技巧形式等に通じないものにはその全價値を判斷しうるものでない。

けれども邦樂――ことに近代の三味線樂のやうに語りもの、若しくは歌ひものとして歌詞の意、あぢはひを曲調に訴へ歌詞とともに合はせ奏ずるものにあつては歌の言葉は直ちに曲の主題の表はれと云つてもよいほど直接的なものである。それ故曲調を離れ、たゞ文學の上から歌詞そのものを論ずるとは穴がち不當な事ではないが、今私のこゝに云はうとする事は、さる大問題ではなく、折ふし讀み耽る古來の小唄の味ひが、その樂器の手を離れてもなほ歌そのものと

して優に尊い抒情詩の一節をなしてゐることを語りたいためである。

世はかはるとも人の情(こころ)にかはりなきが如く歌の言葉は古く稚くともそこに掬みうる味ひは常に新しく常に生きてゐる。ことにその哀傷を巧みに曲調の上に投げかけておのづからなる情緒の搖曳を誘ひ、しらず不知の間に心の琴線を動かして思はぬ嘘唏をさそふものは嵐の如き管弦に和する吟聲でない。ほんの短い、ほんの小さい、月夜の窓にゆれる笹の葉のごとく、寢ながらに聽く水音(みづのね)のごとく影にも似た低い咽び音である。微吟である。或は醉後わづかなる頰に昇る紅に今は消え失せた昔を偲ぶ追憶の歌聲である。人間の理智の機能が影を收めて弱い情緒が嬰兒のごとく眠る間に古い SENTIMENTALISMES(サンチマンタリズム) は容赦なく吾々の心を搖(ゆす)るのである。女々しいか、いくぢがないのか。……併し吾々の白日の理智がこの心を嘲つても、その底に湧き出た涙には案外いはれのあるものが

ある。人はよく情(なさけ)につまされるといふ。歌と心、曲と言葉が均しく胸に一致してこゝに生きた調律をつくると人はわけもなく感動されて終ふ。それはミルトンの叙事詩でなくゲーテの戯曲でもなく、ほんの路傍にきく子守唄、月の夜の追分、或ひは雨の夜の四疊半裡に聞く歌澤の低い音々につまされるのである。

もし近世の三味線に合はされて歌ふ小唄の類にかういふ情緒を味はふことが出來ればその人は「松の葉」の詩情をなほ現代に掬みうる人である。併しこの事を故なきに嘆く世の所謂感傷主義の人に媚びる言葉と誤られては困る。私が「松の葉」を提供する所以は現代の人の詩情に交渉ある詩の眞實性をこれらの小唄から見出すに過ぎない。

「松の葉」の刊行は小唄の集としては比較的新しいものである。既に足利の末

から存在した所謂小唄は多く一節切に合せて歌はれたものゝやうに傳へられてゐるがこれが三味線の勃興以來全く三弦樂に依つて獨占されて終つた。卽ち一方に淨瑠璃說文の類がこれに依つて語らるゝと共に小唄はその本來の哀傷を三すぢの浮いた糸に託し切つたのである。寬永、寬文の頃に至つては三味線は全く小唄のものとなつたやうな感がある。「小歌にのせては三味線をひく、平家に合せて琵琶を引く、歌はずして琴を引く」といふ言葉も殘つてゐる位であるからいかにその流行を極めたかも知られるが既に「松の葉」以前寬文四年に「糸竹初心集」が現はれ、其後餘程經て貞享二年に「大ぬさ」が刊行されてゐる、前者は三卷に分れてゐるがこれは歌詞よりも引きやうを主とし曲も一節切、箏曲、三絃と三つに分れてゐる。後者は引きやうと共に尠からず歌詞も收め中に組歌長歌の新曲など「松の葉」の中に收められたものも既にこゝに見えてゐる。これ

らの書から見ると「松の葉」はずつと後れて、元祿十六年に刊行されたものである。同じく十二年に既に「絲竹大全」も出てゐるが歌詞を多く存する點に於てこの「松の葉」は他に摧でゝゐる。後年「若緣」(寶永三年)「增補松の落葉」(寶永七年)などまたは文政に至つて種彦によつて集められた「諸國盆踊唱歌」(山家鳥蟲歌の寫本)或ひは萬治三年の「吉原小歌總まくり」など所謂小唄の集としては有名なものに乏しくないがこの「松の葉」が比較的最も世間に流布されたことはこの書が後代最もよく傳へらるゝ名高い小歌を澤山收めてゐる點にあらう。が、私の見るところでは詩としての價値あるものに富んだ集であることを云ひたいのである。

「松の葉」の編者は秀松軒としてある。氏も素性も定かでないが孰れ其の道の

粹人とは知れる。「松の葉」と云ふ集の名もその序文に

「于時元祿十あまり未龍集の涼み月秀松軒の木のもとにかきあつめぬれば松の葉と名づけぬるもむべなるべし」

としてある處から推して知られる。「やつがれとしごろ閑暇の茶菓に是をもてあそび知音のこゝろざしありければより〳〵かの本手端手長歌端歌吾妻淨瑠璃新曲の唱歌を草書しかつ古今百首の投節をくはえ花晨月夕のこゝろやりにかいつくをある人ねもごろの求めに應じて櫻木に命ながうせんとするにまかするもの也」とも記してゐる事に依つてこの書の由來もわかる。併し私はその考證のためにあまり多くの言葉は費したくない。「松の葉」の姿に幾分でも吾々の心に新く生き返される詩情があれば讀者とともに只それらを低唱微吟したいのである。

しんの闇にも迷はぬわれを
あゝさてそさまの迷はする。

單純な戀の情には單純な言葉が却つて味ひ深い。「松の葉」の第一卷はこの種の組歌をもつて埋まつてゐる。中で奇聳の趣あるもの、その比喩の巧みなもの、ことに云ひ知れぬ心の Nuance を取り扱つたものなど著しく興が深い。——

＊

比翼連理、夜のてんにてる月は十五夜がさかり、
あの君さまはいつも盛りよの。

＊

忍んだりやな、しのばれたりやな、
裏の細道小藪から。

*

枕にかゝるみだれ髪
いとゞ心の亂れ〳〵てやるせなや
よしやその身が何んとならうぞの。

*

あはで寢る夜は袖ひち勝る
夢は枕のいとまなや。

これは最後の卷の投節の章に收めてある短章であるが私は偶々右の二つを讀んでアヽサアヽシモンスが

I dream of her the whole night long
The pillows with my tears are wet.
I wake, I seek amid throng
The courage to forget

と歌つた一節を思ひ浮べたのである。

*

おつとは錦木とり持ちて鎖いたる門をたゝけども、内にこたふる蟲の音の思ひきろやれ戀のみち、きりはたりちやう〳〵。

*

しのべども思ふ君には逢はずして村さんめはは〳〵ほろとふるほどに
思ひきろやれ戀のみち、きりはたりちやう〳〵。

*

七里小濱のな、砂の數ほど思へども
緣がうすいやら添ひもせぬ。

更に比喩を巧みにしたものに

*

山からが籠のうちでの恨み言
かごが小籠でもんどりうたれぬ。

いかにも味ひのあるそして調子のよい言葉である、さらに色合(ニユアンス)を深めたものに——

＊

月は八幡のまだ空にも往の〳〵とは思へども後に心がとゞまりて後髪が引るゝ。なんぼ戀には身が細そろ、二重の帶が三重まはる。

＊

そちとこちとは松に藤のさがり枝のごとくたそがれどきにかゝる
かゝる情が身に纏はるゝ。

薄暮どきに暮れゆく松にまつはる藤の花の匂ひのごとく情けに纏はるゝ愛の胸

をいかにNuanceに歌ひいでたることよ。

組歌のなかには諸國の俗謠のあるまゝ土語の多くが挿入されてゐるが其の中で「長崎」の部には面白いものがある。

紅は薄くなろともそもじと我とは一期契るべいぞもよさ白髪に小枝の咲くとちざるべいぞよもさ。

慶長年間ジエスウヰト宗の宣教師によつて既に「さんたまりや」の言葉は輸入されたがこゝにも

昔より今に渡りくる黑船、緣がつくれば鱶の餌となる、さんたまりや

と云ふのもある。

端歌は多く言葉の彩(あや)をつけてともすると直情流露の趣きに缺けたものもあるが言葉の巧緻ななかに細かい情緒を宿したものはかなりにある。

絶えて逢はずと文をば通へ、文は妹せの中となる、橋となる、宵々濡るゝ我が袂。

＊

假のねまきに薫物（たきもの）すれば、よしやわざくれ、色となる、戀となる、きぬ〴〵濡るゝ
わが袂。

＊

絶えぬ思と人には告げよ、今は難波の、なにはのみをつくし、身を盡す。宵々濡るゝ
わが袂。

「松の葉」中私の愛誦する「詩」として次の端唄を二つ擧げる。

＊

あれて優しき伏見の里の雪にゆき降る吳竹の折れさふな、雪に雪に雪ふる吳竹の折
れさふな。

＊

刈らば疾く苅れ淀野の眞菰、かれば月影が下にすむ、底にすむ、刈ればかれば月影
が下にすむ、底にすむ。

この二つの短章には言葉自身がもつリヅムもあると共に作者の情緒がその言葉の間に快く流れこんでゐる。雪に萎えた竹のたわむ力が「雪に雪ふる吳竹のおれさうな」の簡單な疊句（ルフラン）によく綜合されてゐる。ことに眞菰の歌になると露はに言つては概念的にもなる心もちを實に自然に暗示的に歌つてゐる。こんな歌の作者が今生きてゐたら必ず秀れた詩をかいたらうと思はれる。作者はほんとの詩情を理解してゐる。「刈れば月影が下にすむ、底にすむ」はたゞそのまゝの情景でありながら歌ふ人の心の力によつて立派な「詩」になつてゐる。

＊

恨みつわびつおもひを志賀の床淋しさよ、つれなき人に見せたや、
庭の柳の糸に風の靡(なび)きしを。

＊

つろ〳〵と出る月を松の枝でかくした、いざさらば切りても捨ちよやれ、松の枝の
下えだ。

長歌の新曲は佐山、市川、生田、朝妻、野川、松岡、小野川、爲澤の諸檢校並びに北澤勾當武州花都の諸作者の手になつたものを五十ばかり集めてあるが私の興味から云へば組歌端歌の短きものに比してあまり優れたものを見出しえない。「吾妻淨瑠璃」もまた然りである。なかで「山つくし」「夕ざれ」「戀つくし」などを愛誦する。

投げ節は多くその唱ふ人の曲調に効果を置く、歌詞も都々逸と同じく「七七七五」の調子であるから輕い短章に過ぎない。そしてわりあひに良い素質の詩がない。たゞ古いことわりを古いことばと比喩で歌つてゐるものが多い。その
なかでボオドレエルの

J'aime les nuages, les nuages qui passent là-bas.....

の散文詩の句をおもひ出させるやうな

吾(われ)がおもひはあの浮き雲よ、
いづこ行衞ぞ定めなき

や、カアルブッセの「山のあなたの」の小曲のやうな

雲のはたてのそなたに戀ひて
住めば住む身のあぢきなき

など、今吾々の口にのぼせてもなほ吾々の詩情をそゝる句もあるが多くは

われは菖蒲(あやめ)の根にこそ泣かめ
引くな袂のつゆけきに

と言つた風な文字の上の哀傷歌の方が多い。しかしこれらの「松の葉」がわが日本の詩歌の上に置かれる位置は決して些少なものではない。これら殆んど名も傳はらぬ無名の作者等の詩は古來の歌聖の歌よりも秀でゝゐるのがある。その可憐な哀傷は Heine, Verlaine, Laforgue, Corbiére, Paul Fort などの Chanson(シャンソン) にも比較しうべき素質をも備へてゐる。

もし民謠を熾ならしめようとし、民衆的に飢ゑた庶民的詩歌を汎からしめんとするならばさしあたりこの小唄のやうな形の上に新意を齎らすことが必要であらう。詩歌の主題に西洋近世の民主的精神を入れる試みもむろん詩を一般化

する手段ではあるが却つて傳統的に親みやすい三味線樂にあはせても唄ひうる更に新しき「松の葉」の出現も穴がち徒勞ではあるまい。既に明治詩壇に島崎藤村氏の「若菜集」あり、また近くは北原白秋氏の「思ひ出」あり、優れた短章の詩作も中〻に多いことではあるが近來この種の小曲があまり熾んならざるを憂ひるまゝかくは贅する次第である。

人道主義

海の狸

人道は車道のかたはらにあり、
さればRIKISHAのめぐるがごとく、
自動車の突進するが如く、
人道は宛ら車道に影響せらる
われ過つて車道にとび入り
巡査の譴責に接したりき――
「往來の左をあるけよ」――
そのごとく、……されどわれは
都大路をまんさんと醉ひどれて歩くものなり。

紅蘭集

凝視　秋月露村

□

正井謙二　清水浮鳥　滑川義彦
浅田眞佐子　大島武男　石渡白映
倉石ちから　高橋一峰　勝本正晃
川路萌葩　菊田諦知朗　西川二紫星
伊東慶信　谷口豐彦　大西花郊
竹内實　中原幽月　宮崎紅聲
大澤忠一郎

□

垂髪少女　松本福督

凝視

秋月露村

一語もかたらずたゞに「吾」を見る、あな久しくも空を見ぬかな

雪ばれの空を嬉しみ野に出でゝ花のひとむら見出でけるかも

日に光る満目雪の冬の田にはつ〳〵もゆる花のひとむら

いかなれば斯くも性なき身なるぞも久しくも見ぬ空を仰ぎつ

雪に暗く埋もるゝ家より女出でゝ仰げる空の夕暁の

いろ

なやましげに沈める君のみごもりと知りてぞこゝろ明るく暗く

落椿なやましきまで瞳に赤しいつしか君は身ごもりてけり

しみじみと雪わり草を植ゑにつゝ春まだき日を愛しみやまず

桑の木

正井謙二

いらいらの心となりて桑の木をぷつつり折れば匂ふ夕ぐれ

古家をこほつ人らの黑き顏たき火に白き齒を見せにけり

指白のわが愛少女の手に握る椿の赤さ忘れかねつも

畑すみに泥手に握る青葱を默して見つむ夕かなしも

葱植うと根もと分かてばさやさやと土落つる音響く夕ぐれ

草はえし古家の屋根をこほつ香の匂ふ夕べの畑なかのみち

すかんぽの花見てあればなにがなし幼き時のかなしまれけり

草山にやまいも掘りの少女らとさみしく見たる春の

夕空

笹もちて山あひのみち下りゆくさみしき心すすきを見たり

動物園の春

清水浮鳥

ちよこなんと尾長猿はも枝先にとまりてひたぶる人参はめり

湯にぬくみ寢ねむとすらしペリカンの嘴を翅にうづくませるは

おんぼろの毛を春風になびかせつ澄ましこんだる駱駝の面は

ふうらふら尻尾ふりつゝおんぼろの醜き駱駝にれが
みるたれ
丹頂のケイジの中の大楓あさみどりそめ萠えにける
かも
びつたりと水底につきて山椒魚ひさしと見れど動か
ざりけり
死せるがに鰐はねぶれりひからびて夢など見らめ羊
齒の蔭にも
紅椿落ちたりければ白兎ぴくり耳をぞ動かしにける
くび低くのべて夕まけまんまろなほろほろ鳥のなけ
ばさぶしも

（二一、四、一九一七）

寧樂

滑川義彦

物乞ふとうなじさしのべより來る寧樂の小鹿よその
つぶら眼よ
かはゆさに抱かんとせしに驚きて逃げ去りし鹿のす
こし憎かる
物乞ふとつぶら眼に入る春日野の小鹿かはゆしせん
べいやらな
嫩草の山はうれしもす黑なる燒草のなかのみどりの
芽ばえ
赤き布つとひるがへし麥畑に娘いちにん麥さくをき

る

赤き布つと翻し白きはぎあらはに麥のさくきるをと
め

麥畠の間のほそ道ゆきゆけば眞土のにほひ麥の呼吸
うつむきついらへする娘の言聞かで白き頸を恍惚と
見る

やはらかき線をゑがけるはだか山ひとなくけぶる青
き麥畠

吉爺は平伏してぞ言葉なくむせび泣きけりわれも泣
きけり（五十年近くわが家に仕へたる下男小泉吉太郎老衰の爲めわが家を去る）

青嵐

浅田眞佐子

あの男話巧者に歌まぜてしるべするかも瀧のほとり
に

葉のみどり窓に光りて部屋ぬちのしづけさわれに遣
る瀬なきかも

風ありとしも思ほへずしかはあれすこし皺よる波の
涼しき

繻子の帶の空解けするが如くにも君に對へば心ほど
けぬ

とる日なく只だ美しと見て過ぐる御手と思へば淋し

なつかし

土に寢る石ひえ〳〵と夜の風の心にしみて夏もつれなう

天地の動けるものゝ影凡て潔しと思ふ夏は來にけり

初夏の心ゆたけし朝毎に風を見るべく野に出でゝ見ぬ

かもめ

大島武男

安治川を行かばかなしも期霧のなかに音なく鷗飛びるぬ

音もなく鷗群れ居る朝なれば狹霧にまじる汽笛もかなし

淀川にくればかなしもそよ風によしは高鳴りさみしきかもよ

此日頃晝はあらざり夜來よと友につとふるなりはひなりし

午後三時晝休憩の笛なれり女工等群れて樂しげなるかな

この朝げ眞新らしき齒磨の袋を持ちしかろき歡び

そよらふく風

石渡白映

あかつきの肌まだ寒き山里の大根畑は霜の光りて

屋根裏の苔も青みぬ春の陽の力になべてものゝ伸ぶ

る日
並木道其のすきまより春の陽の光ほの見ゆ朝の嬉し
さ
そよらふく風の渡りに麥畑の男手輕に鍬持ちてけり
春の陽の淡き日ざしに麥畑を廻りて歸る父の顏よき
若草にねころんで見る青空の瞳に入りし鳥のかずか
ず

月下の人

倉石ちから

雨やみてひんがしの空に月のぼりおもふことなくぢ
つと見詰めぬ

雨のふる野の道を一人とぼとぼと唄をうたひて歸る
なりはひ
うるはしく鶯のなく春の野に鍬をかたげて時をすご
せり

微笑

高橋一蜂

思立ち手紙懷にしぶらぶらと夜なりしかば菓子を喰
ひつゝ
ほのぐと煙り昇れる那須の山眺めやりつゝ馬とば
しゆく
百姓を嫌ひし心はづかしく今の麥見て微笑む心に

春の日は河原一ぱいひろがれり砂を手にしてしづ心なし

さびしさに夜の小窓を打ちひろげ久しく吹かぬ笛を吹きけり

煙草すひしマッチの棒の細煙り蟻のはひゆきまたひきかへる

銃聲に飛び立ち小鳥あたふたと迷ひちらばふひろき蒼空

ゆら〳〵と青きパラソル馬の上馬子も附きをり春の國道

櫻咲く春なりしかば少女らの赤き蹴出のなつかしきかも

病める人に

藤枝地籟

病む君はあたゝかき手に君おくる友のかほなどわすれめもせめ

君が胸よみうるほどに苦しさのわが身に迫りえたへぬ日來ぬ

夜更けてしづかなる時しはぶきの君がへやより洩るれば悲し

病む身をばつねに勵ましたゝかへる執着心ぞえがたかるもの

えぞ松

霰ふる千疊が原の大土に古槍のごと立てりえぞ松　勝本正晃

螳螂が牛の鼾に鎌を立て角のあたりをきつとにらみける

泉水に金魚をねらふ野良猫の根氣よき程に春日長かり

獨居

そのかみをしぬべはかへる悲みをいとしきものとかい抱きしめぬ　川路崩葩

汝をしぬび海にいでゝは春の波暗に消ゆるをかなしみにけり

ぽつたりと落つる椿の音高し峽の獨居に夜も更くれば

病める身

あたゝかく粥も出來たり肉も煮えぬいざたべずやといふ母は老いたり　菊田諦知朗

過ぎし日の心の傷手まざ〳〵と胸に描きて生きるわびしさ

東京の空がなつかし赤き灯にさ迷ふ群にまじりて見

たし

何となく物足らなさの夕かな酒食べても心おちゐず

われながら怪しうなりぬわが今の心に巣喰ふものゝ

かたちに

醉ひ癡れてあたりかまはず泣いて見たし大聲あげて

たゞ泣いて見たし

粉雪

西川二紫星

病む母の苦しむ聲すたちまちにバネの如くも起き上

るわれ

高ぶれる鼓動はやがて氷襄の紐をつたひていづちゆ

くらむ

いたづきの身は寢ねもせでいたづらに灰汁垂るゝ音

數へけるかな

黎明はめぐしなつかしひたぶるに煙草輪にふき獨り

ほゝゑむ

しら玉の酒はたふとしかへるさのほろ醉ひの頰に消

ゆる雪はも

糊臺に吹き入る粉雪拂ひつゝ燐寸はる夜の心淋しも

病む母をのこしまゐらせ旅にいづ烏鳴きにも胸のむ

すぼる

朝

伊東慶佶

鶏舎あくれば雪崩をうちて鶏いでぬたのしきことの
世に充つるごと
楊枝くはへ鶏舎あけたればしらゆきと鶏の背中に歯
みがき散りぬ
つとあけしはみがきの香の堪へがたしなつかしき春
の朝のひととき
桃色のはみがき舌に觸りたればつと甦る春の神經
平凡に倦みたるこゝろ岩にしも投け碎かんと思へど
思へど

漠來りことごと夢な食ひ去れよこの夢の子のいのち
たえまし
かきたつもかきたつも灯の明らまずみとりする身は
獨りなりけり

喜樹の浦曲

谷口豐彦

南國の春は行くなり五月空君嫁く日は雨ともなりな
ん
一人のたふとき人ぞおほけなしきみをうばひて心お
きせぬ
恨むとはまよふこゝろのおろかしさ裏切る人をなど

て戀せむ
あかねさす喜樹の浦曲に貝拾ふ細腰の子が誘ふ戀か
な
すつきりと博多の帶をひきしむる音に見呆けて戀わ
たる子ぞ
草かげにふんわり消えし螢あり麥の香送るトロの上
の風

麥の風

大西花郊

麥の葉に風の光りて觸りたればさやさやとなり夏と
なるらし

亡き兄の古りし洋服つけこつこつと働きてあれば何
か悲しき
わが生きの命いとしみ山あひゆ靜心なく朝草を刈る
眼を病めば朝新聞を讀んだきりぽかんとひと日暮ら
すなりけり
「三界の首かせ」などゝたはむれて父は言ふかもわれ笑
はれず
現し世のわれをうとみつつくづくとわが身いとしく
なりにけるかも

草刈

竹内實

青草の匂ひにぬれて遠方の山脈おもひ草刈りとるも
諸々として鎌のうごきに青草は靡かいゆきぬいとほ
しきまで
かゞやける綠のいろの眼に沁みてなつかしきまゝ草
刈りかねつ
ほのぼのと胸にしみいる青草のにほひに呆れて草刈
りかねつ
うらうらと生ひ伸びにたるあをくさのなにか惜しく
て草刈りかねつ
大作の家持住みし三島野に生れしなれば萬葉を愛づ

赤き苺

宮崎紅聲

いくそたび心まどはす血なるかと皿の苺を頰づりに
けり
藁箱に瞳つむりてにはとりの卵抱ける夏の晝はも
金ペンの先ひまどりて書きもえぬ優しきことをさは
にもてれど
もの思へばもの思はしく夕光り眞竹の籔にたゝずみ
にけり
君呑みし茶碗のふちのほのかなる匂ひなつかしみ口
ふれにけり

生くる日

中原幽月

なやみこそ尊しかくも靈に鞭ちくれば吾は生きたり
惱むため我は求むる酒ながらつゝましやかに人はす
すむる
心憂きまゝに石とりなげんなどおもふにあまり靜か
なる池
山にゐて木を割りければその音が深く沈みてわれに
かへりく
グミの花さみしく白き雨の日は肯ひし雞に餌をもや
るかな

むしつけき麥田の青き畔なれど妹がりゆけばうつく
しきかな

病院

大澤忠一郎

おなじ身の病人なればなつかしむきみは愛しきさけ
髪少女
隣室のなまめく聲ぞうら悲し身動きひとつ出來ぬこ
の身の
目をとぢてわれも男とおもむろに腹へ力を入れて見
たるか

垂髪少女

松本福督

わがあゆみいと遲きから待ち侘びて垂り髪少女月に
立つべし
吾さりて難波さびしと告げて來し汝が黑髪をしぬぶ
なりけり
難波江に住めるをとめらこの月をいかにながめむそ
の色青し
天雲をさけて住むよりひとすぢにつのる想ひのすべ
なかりける
川添に欅並み立つ小笹原春日青葉にてりかぐはしも
つぶら眼のをとめを偲び來し吾に池の浮雲ゆるぎも
せなく

榮光　前田春聲
Am Kriegsende　M. Katsumoto
深海夜曲　平戸廉吉
やまうど　澤ゆき子
異つた朝　松本福督
□
怖ろしい祈禱　北山哲平
野に　藤井月泉
五月の土　倉石ちから
空想の女王　大澤歌朗
太陽　橋爪南洋
都會の朝　森泉たけし
夏拾遺　廣川菽泉
食後の卓　柳虹生

榮光

前田春聲

Léspoir luit comme un brin de paille
dans létable.
(Sagess–Paul Verlaine)

いづみ涌く寂寥の日は深み行けり、生の純潔は彼處に
微笑めり。
おお、孤獨なる日に顯れ來るこころよ。
吾を慰め、限り無き生命の姿を思はする、榮光の慈悲は

われを喜ばすかな。

焔よ。生の焔よ。
榮光の輝くところ、心また深みに焔の燃ゆるを感じぬ。
苦しみ、悲哀、惱み强き生活の日に、
生と生活と美はしき世界を焔は見せしめぬ。
榮光はわが生に溢るゝや、
翼ある歡喜は悲痛の我が日をはためけり。
强き願望はいや深く人生をさゝやけり。
おお、そを聽く心よ。榮光の優しき私語を知りし心よ。小

鳥の如き心よ。
とらはれざれ。
いま、生活の日に和平と力の想を合し。
とゞめ難き心の願望を聽かしめよ。

寂寥の日は深み行けり。生の純潔は深み行けり。
わが周圍より慈悲の手を伸べて、
焔と欲求の言葉を語り、
いま、感謝の涙、深き榮光はさゝやくかな。
おお、爾また孤獨の日に思はるゝ時。

（獨語、7）

小曲二つ

1. 野にて

野の上に照る陽よ。
心のまゝに辿りゆく。
雲の上なる汝がすがた、汝が焔、
若き日のわが胸に輝くや、
生きよ、生きよ。寂しき心よ。
心のまゝに。

2. よろこびの時

深きよろこびにわが願望(ねがひ)は生きよ。
悩ましき春は深めど、
おゝ、幻の中なる無限のよろこび、
地の上によろこびは輝けり。
小鳥よ。さびしき心よ。
深きよろこびに生きてあれ。

Am Kriegsende.

(Freie Gedichte)

Noch wieder ihr neugierige Menschen,
Es ist zu spät zu kriegen.
Das Reich der Schattenb tief ist die Nacht.
Melodien ohne Stimmen.

Alle gingen so müde und geschwitzt
Gern zn Erdenbett,
Um nur flüchtige Zeit auszuruhen,
Aber sie erwachen nicht.

Über der einsamen Ebene.
Schuärmen noch schwarze Vögel.
Höhre nicht!? Sie pflücken.
Lebendig eingesargte Blumen.

Unsere Erde wie Todeswellen.
Schläft unter einem Sterne.
Das Licht mub nah, verfluchte sei Nacht!
Lausche raunende Gesänge aus der Ferne!

1. März. 1917.

M. Katsumoto.

深海夜曲

平戸廉吉

よなよなもつれてはまたよする纖細き匂の糸、
涙の如くまたもの憂き戀の如く、
おとなしき霧雨の中大空によろめく月の吐息。
白き單音！（時をりさし覗く青菫色）
海虫の珍らかな洋燈は寶石の光して、
仄かに波の穂先にゆれかゝる。

纖細き匂の搖曳、夜の唇に海の心に、
はてしなき夢より夢の瞬間にをどり、
また影淡き漂泊兒の首に仄白き無常となりて浮ぶ、
されどそはまだ海松の林に甘き雨のごとよせ來れば、
何處にか潛める海の踊に幻の影を刻み、
寂滅と狂喜とまた得も知らぬ心に動きて舞ひ踊る。
音もなき靜默の樂は絶間なくわだつみの底にゆれて、
糸なき胡弓の如く、また遠き奥津城に聽く歌唱の如く、
賑かなれども悲しき夜の舞踏場！

あゝ今は皆永きあがれの宙を抱かんと、
各々の手を高く空に伸ばせど
なべての心は底深き遠い國へと陷ちてゆく。

若き時には薔薇の花園

空とぶ春の告知(しらせ)を聽けば、
若き時には薔薇の花園、
若き命が踊れと叫ぶ、
うまき酒は甕にしたゝり、
手にもあまりて匂ふ「青春」
あゝ少女らよ野邊に巷にさてはいとしき汝の心に、

雨降りて色褪(あ)せなばなにかせむ、
夜半の嵐に匂ひ失せなばなにかせむ、
をどれ諸(もろ)共(ども)、幸ほふ春の朝(あした)に。

やまうど

澤ゆき子

なつかしきものは、
太陽の輝かしくいきづくことなり。
わがなやみの、
その光の中にをどることなり。
なほせつなく微笑ましめよ。
なほも無慘につかれゆけよ。
云ふことばもあらずして心なくつかれはてよ。

やりばのない程の腕を胸におきて、
みづからをあたゝむるか弱き愛をもとめよ。
願はくば荒れたる小さき耳をとらへて、
(なやみのふかさ、悲しさをあつめむ)
「されどかゝることがらは、
あまりにはてしなく、
われにはふかきいじらしさなれば、
たゞ默するよりせんすべなし。
なれやすきものゝ如く、腕のうちに、

思ふがまゝに唇をもやし、
かよわくつかれし愛の時は、
心の響きふかくとだえて、
わが靈(たましひ)は無慘に、
恐るゝ事をもわすれたりき。

いたましくもあへぐよろこびと、
おもひ出のかすかな心の眠りよ。
されどもそのふかみの蒼ければ、かよわければ、
つかれたる心いつしか、
水にうかぶ光の如く自らにおぼるゝ。

異つた影

松本福督

あすふあるとのうへを
ふしぜんに雪駄をひつぱつてゆく
ふたつの黒い影
星はやみから光りをなげてゐる
かくてそばだつ大建築物の夜は
ひよろ犬いつぴきにふけてゆくのだ
みんなちがつた影をつくり
てんでにちがつた色をかんがへながら

だまつてずんずん
ながい影をひきながらあるいてゆく
おれは首をふりながら
ふたつの影と異つたあこがれを
異つた方向にむけてゐる
自動車をやりこしたあとは
あの道頓堀の一夜を考へてゐる。

さはれとほいみやこの
大道をあるいてゐるものだ、
二つの影も一匹の犬も

自動車も
星もみえない
ただざらり
じやりをふんだおとのみが
死のかげを追ふごとく、
ひつそりしづまつた自然の沈默を
ゆるがした。
……
あとは死の靜寂……。

怖ろしい祈禱

北山哲平

かなしい五月のついたちであつた
温かい春の陽の光はいちめんに黝んだ地面にそそぎ
風もないのに顫へる草の葉のやうに
あをいかほをしたわたしの寂しい心靈は
歔欷ながら靜かな墓地のあたりを彷徨うてゐた
大黄のひろい葉があたりの靜謐を吸うて涙のなかに
耀いて見える
わたしはふと疲れた視線を澱んだ水の片隅に置き
ぶくぶくかたまつて浮かんでゐる蛙の卵が

よくも此麽に殖えたものだとかんしんし
友にわかれた陰欝なとがつた頰に
さびしい微笑をうかべてゐた

草の根をむしりながら
わたしはわたしの寂しい情欲をこらへ
孕むやうな風のやはらかさの中に坐つて
身じろぎもせずに考へてゐた
わたしの肩に例の疼痛がしのびこみ
硝子體のやうにすきとほるわたしの胸が
扁たくみぢめなすがたに見え

皮膚いちめんが總視覺となり
ふくらんだ蛙の白い腹部が
やがてわたしの心の蠱惑となつた
ぎよう、ぎよう、ぎよう
薄つぺらのすげの葉のかげで
蛙の球嚢がびつくらしたやうにうごく
性欲の異常な發作と　それに伴奏(つれひ)くいたましい訴へ
の聲である
震慄へてゐる心靈のなげきである
ぎよう、ぎよう、ぎよう
情熱を彈きかへす彈性のつよさが、またわたしの心を

惱ます
怖ろしい音樂　怖ろしい祈禱
わたしの頰にはいつかあつい涙がながれてゐた

わたしはわたしの寂しい情欲をこらへ
腐つた人間の卵巣のやうなにほひをかぎ
溫かい水にうかんだ卵が
だんだん成長するのをよろこび
觸れがたい蛙の肌へに
不自然なつよい親しみを感ずる
そして寂しい寂しいわたしの人格は

眞摯(まじめ)に孕んでゆくもののかなしみとよろこびとを知るのだ

私はやつぱり草の根をむしりながら
ひとりで祕愛のなみだをながす

——一九一七・五・一〇——

野にて

藤井月泉

吾れは希望に輝やける顔々より遁れたり。
浪だつ都市を、すべて虚飾に燃え立つ群集を越えて——
吾れは汝の腕に歸りゆく。おゝ自然よ。
吾が實のりてし多くの果物を、吾れ自からを、

今こそ汝の胸襟に納めたれ。

戸外に立ちて

戸外に立ちて、
吾れ森の奥に吾が琴の鳴るを聞けり。
いま吾が胸底をかすめて翔けゆくものあり。
心の復活！
大地の腹よりは無數の「生命」たちのぼり、
云ひ知れぬ歡喜はよみがへる。
心の自然へ多くの「危機」は新らしき「時」の上に走せ參じたり。

五月の土

雨はふりさけび——
むせびて流れ、
麥の青き葉に
玉なす光
見よ、
尊きしたたり
やすらけく
地は音してひびきいづ……。

倉石ちから

空想の女王

ひとりゆかむ
ひとりつくらむ
新らしき世界の旅
詩の天上
そこに寶玉を持つ者は
綠りの瞳せる
美しき空想の女王

春來る

大澤歌朗

梅の匂ひ漂ふ庭より
眺むるはうらゝかな空の夕べ
忘られぬ君が頬
うすくれなゐの夢の色
つゐおくのやるせなさ

夕日はなやかに
ほゝゑむ　庭の若草
春來る　戀人のごと

太陽

橋爪南洋

太陽こそは誰のものでもない
誰もが太陽でもあるけれど
誰のものでもあるその太陽は
人間にはまことにその身のみを考ふるべく
あまり大きく餘り強くある
太陽の下に爭ふは不安である。
太陽を失つた人人よ、
泣きながら走り廻る人々よ
なんぢらはみな太陽を手に、取らうとする、
憫笑に堪へた痴け者だ。
鍬を握れば太陽は

鍬の刃先にうつり、
網を引けば太陽は、
魚の鱗にひかる、
求むる者よ今は見よ
太陽は、今ぞ登ると
平凡にして永久に靈妙なる
太陽は、太陽は
たゞ肉體にのみ輝くだらう。——奔勞と健鬪の肉體に
のみ。

都會の朝

森泉たけし

おゝ朝の光りは
家々の屋根の上をすべつてゐる。
私は二階の窓から空を見上げた
青い空は慈母の瞳のやうに
愛に厚く懷しみ深い。
この空のもとに都會の人々は
苦しき一日の戰ひを初め出す。
彼等の上にも
美しい淨い朝の光りは輝き流れてゐる。

疲れ苛まれた都會の心よ。
しかし、美しい朝の光りは
微笑みつゝ彼等を愛し照してゐる。
おゝその大いなる愛、——力。

私の魂は感謝の歡びに躍る
美しい朝日を浴びつゝ躍る。

見よ、向ふに二三本かたまつて生えてゐるらしい
黑い大きな樹——

その樹の枝の形も葉の色も
しつかり見定めることは出來ないが
その葉は朝の新しい生の衝動に震へてゐることを
私は切に感ずる

夏拾遺

廣川萩泉

舊恨十首

去年の夏磐城の濱にわがつりし淺黄麻蚊張たがつるらむか。

旅に見し卯の花多にしろたへの雲の眞下にまた咲くらむか。

罌粟の花ふたたび咲くと告げきたる率爾の消息のあはれなるかな。

さる夏の海の繪あまたならべ見つなみだ湧くもよ人にかかはり。

たまきはるいのち深かめて寄る浪のたかくは散るな君はなけくな。

君を得て友と好からずくわん草のちる日のもとに別れぬるかな。

山を狹にくわん草の花黄なりけむくわん草の花誰が見るらむか。

磯ゆかばいそ打つ浪とおもへかも離れつつ呼ばふたびびとの歌。

うかりける卯の花道のみちしばにしばしば垂れし泪なりけり

をとめごがひれふる山ゆしろたへの雲たつらむか逢ふよしをなみ。

白秋に酬ゆ三首

葛飾にかつ住みなれしなれ妻のさみしき振のたもとにぞ逢ふ。

久しくてあひ見むとする男同士かたみに笑みて坐わるうれしく。

つままきて足らへる顔をむらぎものこころいかりて酒たてまつる。

雲は酒盃の上に在り

天ぎらひ流らふ雲のほのかだに愛みかねつ酒によらずば。

花をもて淨めむ

身をふかく怒りかなしみひそか町ひそかにいでて花薔薇買ふ。

自禍

三十になほ足らずしておとろへぬ酒にかかはる死すらむか。

柳村先生遺著
卷頭題扉繪詠

敏といふ名を遠天にうしなひてわれ等は晦くならむとすらむ。

千にしてたらはぬ才をはづかしみうちに泣きつつ遺著を飾るも。

——六、一九一七——

食後の卓

柳虹生

□

本輯は純然たる小曲集にしようと思つたが思ふやうに原稿が集らないので先づ短歌と小曲中心として輯めて見た。銷夏の讀物としても適するやうな輕いものである。殊に短歌は現代の閨秀歌人の作を多く頂いた。他に與謝野女史のも頂ける筈であつたが御都合惡かつたので殘念であつた。「伴奏」はこの秋に於て大に飛躍するつもりである、それは全紙面を擧げて諸家自選の代表的詩選にしようと云ふ計畫である。今その詳細は報道出來ないが現代詩壇の名ある詩人の作はすべて網羅すると共に諸君の詩作も諸君自選のものを各人一扁づゝ必ず登載することにする。最もその作物は一度私の手で嚴選した上で載せる事にするが諸君に於ても其の積りで努力して頂きたく思ふ。この集は大正詩壇の代表的撰集として後世に殘しえらるゝ丈けの質量を保ちたく思ふのである。刊行は十月始めになる。紙數も今のものよりずつと增加する筈である。締切は八月末日迄にするからそれまでに規定の範圍に於ていくつでも寄こされたい。それを嚴選の上掲載する。この輯にはひとつとすると短歌は載せないかもしれない。しかしこの詩選の次ぎには必ず

現代短歌選もやらうと思つてゐるから短歌ばかりの人の作はその時網羅することにならうと思ふ。然し短歌の添削批評は勿論常どほりで差支へない。

□

諸君の作物が追々進境に達してきたことは何より喜ばしい。ことにあまり他の雜誌にも發表せず「伴奏」に依りてのみ詩作せられる諸氏の作は確かに特色あるものを齎してゐる。これは他の一二の人から直接聽いた話しだが「伴奏」に據る諸君の詩は何ら一定の型が見えないのが非常に良いと云はれた。この言葉は私を嬉しがらせた。眞にさうであれば(私はいつもさうである事を望んでゐるが)私は諸君に對して誇ることが出來る、又諸君は他に對して誇ることが出來る。何となれば諸君の詩作は諸君の各自の特色を充分發輝したものであるからである。一體私は一つの型に入れて詩を見ることは嫌ひだ。ことに皮相に私の詩を摸してくれる人は嫌ひだ。私はどこまでも個性を尊重する。詩の添削に對しても私は常にその人を忘れまいとしてゐる。この事は諸君に於ても諒としてくれると思ふ。

□

序に今迄云はなかつたがすこし社友諸君の詩作について語らう。今のところ私の社へ入つて以來詩作を續けてきた人で平戸廉吉君の作、澤ゆき子君の作は共に可成りな地歩を詩壇に占めえらるゝ事と思ふ。平戸君の豐麗な感覺と洒脫で可成り深い比喩とは君の都會的洗練を示してゐる。澤君は女性として他に見られない獨異性を持つてゐる。君のもつてゐる孤獨の悲哀は確かに美化された一つの靈である。詩の技法に於ても最秀でゝゐる。又短歌に於て秋月露村松本福督の二君も或る地歩は占めてきた。最近松本君は詩を試みた。ずうと詩をやると意氣込んでゐる。二君とも感性と詞句に秀でゝゐる。松本君は大阪に居たが此春から上京早稻田大學にゐる。淺田眞佐子、渡井春雄、窪田照代、山崎泰雄、朱燿翰の諸君の進境も目醒ましい。渡井君の短歌は既に或る獨歩の地域に達してゐるし淺田君の詩や歌はその輕妙な句法が手に入つてきた。窪田照代君は信州の山村に住む女性であるがその可憐な哀傷には天性の詩人的情熱が見える。山崎泰雄君の詩は其の洗練された感覺に於て優れたものを有つてゐる。朱燿翰君の詩も實に獨特の味ひがあ
る。氏は明治學院に在學中の朝鮮國人である。わが親しき隣邦の青年にしてこれ丈けの

詩をかき得るとは甚頼もしい。朱燿翰君は後來朝鮮國の詩壇を興さんとを目的としてゐる。私は同君の不斷の努力を甚壯とし多としてゐる。今夏は京城に歸るさうである。清水浮鳥、正井謙二、倉石ちから、三幡よし夫、藤井月泉、大澤歌朗、竹内實、小室楚囚諸氏の詩と石渡白映、大島武男、大澤忠一郎、高橋典一郎諸氏の短歌は將來有力な地歩を占めてくるものゝやうに思はれる。諸君は皆獨特の個性を持つてゐる。それが充分發揮される迄には尙ほ幾多の年月と努力を要しようが皆製作に熱心なのが何より嬉しい。最近入社した北山哲平、森泉猛、藤井五郎雄、伊東慶佶、大西花郊諸氏の詩、滑川義彦、林早技、西川洋諸氏の短歌も各々有力な未來を有つてゐる。殊に北山君森泉君、大西君等は既に今迄に可成りな習練を積まれてゐることが自己の成長を早からしめると信ずる。又別な方面から獨逸詩を創つてゐる勝本正晃君は今尙帝大法科に席を置かれてゐるが君の多才は繪に詩に甚面白い獨創を示してゐる。氏は立派な健實なディレッタントである。社友ではないが「伴奏」に依つて詩作を發表してゐる前田春聲君の詩はもう立派に中央詩壇に出ていい作品である。同君の謙讓な詩作態度がその作品を清高な輝きに充たしてゐる。最も獨創性のある力と潤ひに富んだ詩である。尙他の新しい社友諸君の作の評も追々して行き度く思ふ。私の添削は割り合ひに時間がかゝる。それは可成りその人に忠實にならんが

爲めだ。どうか其の邊の事も御承知願ひたい。

□

それからこんな事はこゝでいふべき筈ではないが一應諸君の耳へ入れておく。それはかういふ刊行物に著きものゝ經營難だが始めから夫れを自覺して立つた以上別に怖ろゝこともなく勇往邁進してゐるものゝ一寸口に出し難い苦しさもある。實をいふとまだ會員が百にも充たない。尠くとも二百の會員がなければ「伴奏」は收支償はないのである。店頭で賣れる數も割り合ひに尠い。それ故私の財布がいつもその爲めに空虛になる。私は決してそれを怖れない。けれども生活費の中へ侵害したり買ひたい本も買へなくなると自分の戰鬪力のために嘆かざるを得ない、私はどこまでもこの詩社を維持し刊行物を出してゆく、その點は諸君に安心して貰ひたい。が同時に出來る丈け社のためにも力を盡して購讀者や社友の勸誘も試みられたい。諸君の家と思つてこの社を增大さしてくれ玉へ。就いて今度假りに維持社友と云ふ規定を作つた。これは毎月社費以外壹圓以上の金員を好意を以て社のために收めて下さる方になつて頂くことにした。別にこれといふ大きい報酬も出來ないが社から出る刊行物の無代贈呈と出來る範圍に於て其の方の作物

は添削の上他の有力な雜誌の上にも紹介の勞を取る事、其他種々の便宜は計りたいと思ふ。勿論これはこちらがそれらの方々の好意に對する寸志でそのため他の社友の方々を粗漏にするなぞといふ事は毛頭ない。これは只金員の餘力あり又社に同情ある方に申し上げる迄で其の維持社友となるならぬはむろん諸君の御自由に任せる。決して懇願して諸君を苦しませるものではない。其の事は誤解なく願ひます。

□

最近私に贈られた書物の中で齋藤茂吉氏の「續短歌私鈔」は私に色々の方面から敎へられる所が多かつた。殊に實朝に對する研究に於てはその歷史的實證の豐富な點に於ても非常に優れたものである。「短歌私鈔」を讀まれた讀者は勿論歌に志す方々には是非讀まるべき書と思ふ。向井夷希微氏の「よみがへり」といふ詩集も私は可成り懷しみを以て讀まれた。氏は詩作に志ざしてから十數年になる。私は氏の如き紳士が新らしい詩に愛情を以て詩作に努められる事を甚だ嬉しく思ふ。渡邊湖畔氏の「草の葉」も私に懷しい歌集であつた。氏の歌の如きはもつととうに歌壇に認めらるべきものであつた。その洗練された詞句と清爽な詩情とは本輯の同氏の歌に於ても窺はれるであらう。

松村みね子女史の飜譯は實に當代に得がたいもの〻一つである。私は最近女史の譯著にかゝるシングの作「いたづらもの」を一讀してかくも滯りなくシングの作を讀むことを得たのを喜んだ。そしてこの位こなれた、意味以外味ひ迄もよく汲み取つた譯は最近に見得なかつたものである。私は深く女史の努力に感謝する。

□

次輯の原稿〆切は九月十日とする。

轉居

今回左記へ轉居致候間總ての問合せ、入會申込、送金、圖書の寄贈及私信とも左記宛願上候

東京市牛込區神樂町一丁目十二番地

曙光詩社

川路柳虹

（電・番七二二）

大正六年六月廿五日印刷
大正六年七月五日發行

伴奏第四輯（夏の巻）奥付

伴奏

不許複製

定價金四拾錢
郵税金四錢

編輯兼發行者　川路誠　東京市本所區番場町四番地

印刷者　飯島省一　東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市小石川區丸山町十七番地　曙光詩社

□曙光詩社清規□

詩社の目的

□曙光詩社は、新らしき詩歌の作者、研究者、愛好者より成る一團です。

□曙光詩社はあらゆる詩歌の作者、研究者、愛好者に資するため、一般社友を募集し、年五回詩文輯「伴奏」を發行し、尙初心者のため同附錄として「詩歌講義錄」を刊行して之を頒ちます。

□曙光詩社はその一切を川路柳虹が主宰し社友の詩歌に對する批評添削質疑に應答します。

社友及作物

□社友は二種に分ち、普通社友特別社友とします。普通社友は毎月左の種別の原稿を送付し之に對する批評添削を乞ふ事が出來ます。

△長　詩（行數を限はず）　二篇迄
△小　曲（十行以内の詩）　三篇迄
△散文詩（百行以内）　二篇迄
△短　歌　二十首迄

特別社友は左の種別によつて批評添削を乞ふ事が出來ます。

△長　詩（行數を限はず）　三篇迄
△小　曲（十行以内の詩）　六篇迄
△散文詩（百行以内）　三篇迄
△短　歌　四拾首迄

（右の範圍内に於ては一人にして數種を兼ね寄稿して差支ありません）

□批評添削を乞はるゝ原稿は字體明瞭に現住所氏名を明記し各行間に餘白を存すること、貳錢郵券を添へる事とを注意して下さい。「伴奏」誌上に掲載すると否とに關はらず原稿到着の日より十五日以内にに加筆して返却します。掲載すべき原稿は指定しますから返稿の中から其の作物丈け再び淸書して寄送して下さい。原稿締切は毎卷發行前二十日とします。

「伴奏」及「詩歌講義錄」

□「伴奏」は年五回發行の菊半截形紙クロース毎頁百五十頁内外の優美な詩集で社友の詩文及現代詩壇の諸名家が得意の創作を掲載する他研究材料として毎篇川路柳虹の詩論若くは評釋を掲げます。

□「伴奏」は一年五回凡そ左の期節に於て發行します。時日は出版の都合で一定しませんが凡そ其月の廿日前後とします。

新春の卷（一月）　春の卷（三月）
夏の卷（六月）　秋の卷（九月）
冬の卷（十一月）　別輯（臨時）

□伴奏」は社友には無代で配布します。

□「伴奏」は毎卷特に初心者のため附錄として「詩歌講義錄」を附し特別社友には無代で配布する他實費貳拾錢送費貳錢を以て「伴奏」同樣希望者に頒ちます。

□「詩歌講義錄」は菊半截形六十頁内外の小册子で專ら初心者のため詩歌の概論作

法評釋等に渉つて川路柳虹が講義をします。

社費及購讀費

□社友は普通特別共に毎月社費を納める義務があります。普通社友は一ヶ月金參拾錢、參ヶ月分金九拾錢、六ヶ月分金壹圓八拾錢、一年分金參圓五拾錢とします。又特別社友は同樣に一ヶ月金五拾錢、三ヶ月分金壹圓五拾錢、六ヶ月分金參圓、一ヶ年分金五圓五拾錢とします。社費は便宜上三ヶ月分以上を納付せられたき事、又毎月送付せらるゝ方は必ず前月末迄に翌月分を前納せられたき事、送金は必ず郵便爲替に限る事等を注意して下さい。

□入社希望の士は必ず規定の社費を添へて御申込下さい。又入社退社は隨意なるも、途中退社には前金を返却しないことに決めます。前金切の節は「伴奏」の包紙が端書で御通知します。

□社友とならず單に購讀者として毎卷發行毎に「伴奏」が購讀さるゝ事は自由です。但し作物を寄稿する權利はありません。

「伴奏」購讀者は一册金四拾錢郵税四錢三册分郵税共金壹圓參拾貳錢、同五册分金貳圓貳拾錢です。

□「伴奏」附錄「詩歌講義錄」は直接購讀者以外に書店に於ては販賣しません。講義錄の無代配布を受くるものは特別社友のみに限ります。普通社友で希望の士は實費を別に出すか特別社友に變つて下さい。

但しこの講義錄は詩歌の初心者に向つて發行するものですから特別社友であつても入用なき人には送付しません。

□「詩歌講義錄」の購讀費は一册貳拾錢郵税貳錢、三册郵税共六拾六錢、五册同壹圓拾錢とします。

□「詩歌講義錄」は一年五回を以て終ります。其の第一回は大正六年一月より同十二月に至つて完了します。「詩歌講義錄」は「伴奏」の發行毎に一册づゝ發行する以外には刊行しません。但し購讀は何時でも隨意です。

支部及支社

□本社の社友三名以上のある土地には支部を設くる事が出來ます。また十名以上ある土地には支社を設ける事が出來ます。支社の命名には其地方の名と上に曙光詩社といふ文字をつけて其存在を明かにします、支社には毎卷一部づゝ「伴奏」を送ります、支部並に支社に對しては會合上のあらゆる便宜を計ります。

□支部並びに支社に於ては社友の社費を纏めて本社に送る事も出來ます。

社友の特待

□社友(普通特別ともゝ)五名以上紹介された方にはその勞を謝する爲め若し普通社友ならその社費を以て特別社友の待遇をし特別社友である場合には半年間の社費を免除します。

□特待を受けた社友には東京で發行する文學書籍(雜誌を除く)購入の場合は定價の一割引で差上げます。

川路柳虹著作

□路傍の花(絶版)　東雲堂

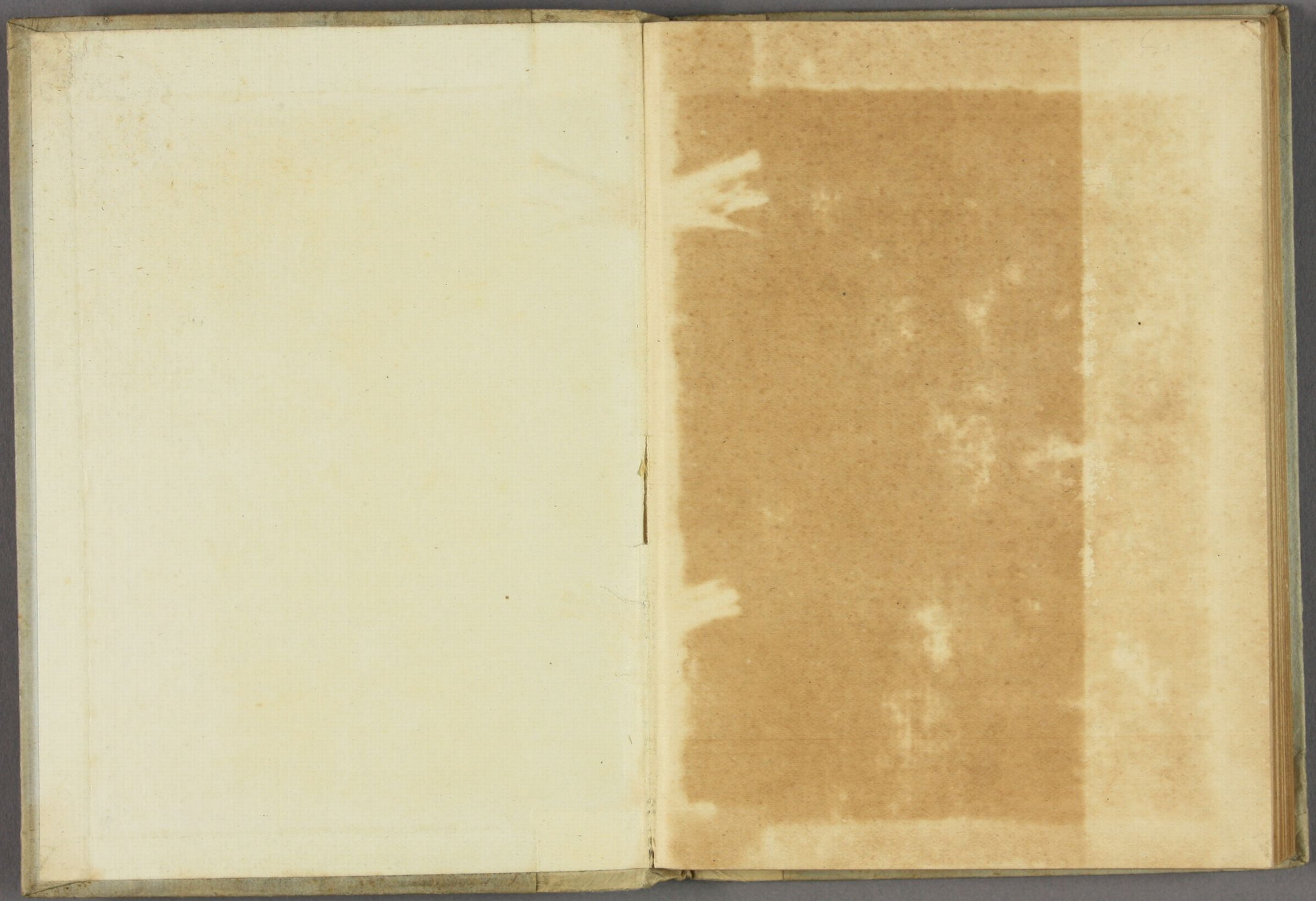
□かなたの空　東雲堂

□ヴエルレーヌ詩抄　白日社

詩歌講義録（伴奏附録）

一冊定價貳拾錢郵稅貳錢
年五回發行一年完修
毎冊六十頁體裁瀟洒

「伴奏」の附録として發行する「詩歌講義録」は專ら初心者のため詩の何者たるかを說き併せて詩の作法評釋歷史等に及ぼし回を追ふて微より細に入る覺悟です。詩の何物たるかを會得し詩の本質に觸れんことを乞はる、諸君に取つても有利な書であると共に詩の作法を說く書としてこれ以上完膚なものはないと信じます。本講義録は本詩社の社友及び直接購讀者以外には絕對に販賣しないものでありますから、其の御積りで御覽下さい。本講義録の執筆者はすべて川路柳虹氏であります。

□詩とは何か（詩歌概論）　詩の種別——詩の形式——詩の本質——西詩綱要
□長詩作法　□短歌作法　□詩歌に要する語彙
□「萬葉」及「古今」　□新詩評釋　□明治詩史
□御申込はすべて爲替にて願ひます。

發行及發行所　東京市小石川區丸山町十七　曙光詩社